なセンターは、各地域内の労組と人権団体の連携で、さまざまな都道府県に設けられています。なぜ、このような活動に労組がかかわるのかを考えるために、この菅原文太さんの主張をちょっと見てみましょう。

こう書いてあります。「良心ある人々は、国が違えど、同じ人間だ。みな、手を結び合おうよ。政治の役割はふたつあります。ひとつは、国民を飢えさせないこと、安全な食べ物を食べさせること。もう一つは、これが最も大事です。絶対に戦争をしないこと！」。この発言の三週間後に菅原さんは、亡くなるわけですけれども。

こういう発言は、労働組合の原点にもつながるものがあります。たとえば、アメリカにも、中国にも韓国にも良心のある人々はいる。国は違っても同じ人間だから、「みな、手を結び合おうよ。」とありますが、これは、一九世紀から二〇世紀初頭に労働組合が広がっていったときの基本的なスローガンである「万国の労働者よ、団結せよ」につながるものがあります。古いと感じる人もいるかもしれませんが、一人だと会社に文句を言えないけれど、まとまることでモノを言っていこうという精神ですね。

働く人たちの抱える悩みはみな、共通している。戦争を始めると、生活をよくするための税金や資源が、戦費に回ってしまい、暮らしはめちゃめちゃになる。だから、国同士が角突

図 4-2　石川県平和運動センターのホームページより

き合わせて戦争するんじゃなくて、飢えないために、戦争反対へ向けて働き手が手を結びましょう、という呼びかけなわけです。

戦争で勝って、相手の国から物資などを奪えば労働者だって結果として豊かになるんだからいいじゃないか、という考え方もあるでしょう。実際、第二次世界大戦まではそういう考え方は根強かったわけです。だから戦争が起きたとも言えます。ただ、戦争が起きると、死んだのは、圧倒的に前線に出ていく中低所得層の一兵卒だったわけです。これにとどまらず、大戦では「総力戦」といって、戦争に出ていかない女性や子どもや、お年寄りも大量に死んでいきました。

そもそもいったん戦争が始まると、だれも反対できなくなり、賃上げだの、労働条件だの言っている場合ではなくなります。どんどん人が死んでいるときに、